

巻 頭 言



教授 小林 裕明 (平成26年度入局)

同門会誌をなるべく早く皆様のもとにお届けするよう教室スタッフに指示しながら、私自身が国内指針やガイドライン作成等の学外の仕事に追われ、今年も同門会誌の発刊が大幅に遅れたこと、深くお詫び申し上げます。住所録も掲載される本誌は少なくとも年賀状に向けて年内にはお届けすべきで、今後このようなことなき様、猛省しています。

さて、スポーツが大きな感動を呼び起こす理由の一つに、大変な切磋琢磨を経たアスリートがその成果を表現する舞台が筋書きのないドラマであることが挙げられます。情状酌量の無いリアルな競争のため、努力が報われる者、報われないものの違いはありますが、それぞれのアスリートが陰で積み重ねてきた過酷なトレーニングがあるため、いずれの結果でも私たちに感動を与えるのでしょうか。そんな観点から今年は2つのスポーツが私の心を揺さぶりました。まずは流行語大賞にも選ばれた“One Team”のラグビーですが、「合宿中の練習に比べたらそれ以上に苦しいもの・辛いものは世の中になかった」とコメントされる非常に過酷な合宿を経て、その成果を存分に発揮してくれました。スクラムの時は同僚と肩を組みながら全員で前に押し、ランで倒される時は後ろから来てくれた同僚にボールを託すという、“個の力でなく集団で戦う”ことでジャイアントキリング達成するという感動は国民レベルの結束感を生み出すレベルまで日本人の心に響きました。医療の世界でも“私が私が”ではなく、お互いが相手を思いやりサポートし合うチーム医療が大事で、その結果、より良い医療を患者さんに届けことができるのですが、彼らに改めて“集団のちから”が想定以上の成果をあげうることを教えてもらいました。チームビルディングとは個々の構成メンバーが主体的に個性や能力を発揮しあい、一丸となってゴールを目指すチームを作り上げることですが、若い世代が増えてきた当教室にとっては、まさに“One Team”を作って、個の力の単なる足し算だけでは到達できないレベルの臨床と研究を展開していくことが必要と感じさせられました。

もう一つの私にとって感動的だったスポーツは、ワールド・ボクシング・スーパー・シリーズ(WBSS)バンタム級の決勝戦でした。世界で一番強いバンタム級王者を決めようという催しで、短時間のノックアウトで次々に王者クラスをKOし、決勝にまで上がってきた井上尚弥(26才)がレジェンド級の名王者ノニト・ドネア(36才)と拳を交えた一戦でしたが、なんと井上は2回にドネアの左フックで右目上をカットし流血(のちに眼窩底骨折と判明)し、物が2重に見えさらに血液が流れ込んで見えないという窮地に立たされます。今までダウンはおろか流血したこともないまさに“世界最強の矛”であった井上は、攻撃能力は素晴らしいが守勢に回った時の防御能に問題あるのでは?とみられていました。しかし彼は右目をグローブでガードし打たれないようにしながら接近戦に変更し、顔面よりも動きの少ないボディーに的を絞って攻撃を続け、最終

的に判定勝利します。右目が見えないという窮地を最後まで相手に隠し通して、“世界最強の盾”でもあることを証明しました。流血と眼窩底骨折で精神的動揺を受け、当初の戦略を大きく変更せざる得ない状況のなか冷静に対応し、そのうえ、彼が今回選んだ防御法は何と対戦相手のドネアが以前、別の対戦相手から同じ苦境に追い込まれた時に繰り出した対処法だったとのことです。私たちは井上が苦戦を強いられたことで凶らずも、彼が持つ12ラウンドを戦い抜くスタミナ・打たれ強さに加えて、苦境に立った時の対応力というポテンシャルの高さを知ることになりましたが、本番の舞台で今まで経験したことのない窮地を乗り越えるために、彼は普段からそのような緊急事態の対処法をシミュレーションしていたとのことです。私たちも手術中の予想外のトラブル、未経験の疾患・病状の急患などに対応することがありますが、そこで患者を救うのは常日頃の稀有な状況・病態に関する知識の習得とシミュレーションに他なりません。改めて日々のカンファレンスなどで他の医師の症例から未体験の状況・病態に対する診療経過をあたかも自分が経験したように振り返ること、うまく行かなかった症例は苦いカルテとして反省して次回診療時に繰り返さないこと、うまく行った症例でもさらに最善の医療は無かったかと検証すること、の大事さを痛感した試合でした。この試合には素晴らしい後日談もありました。戦前、2名の息子たちに勝利者トロフィーである“モハメド・アリ・トロフィー”を必ず見せると約束していたドネアは、なんと恥を承知で「一晚トロフィーを貸してください」と、涙を浮かべながら井上をお願いします。以前からドネアを敬愛していた井上は快諾し、この異例の“トロフィーの貸し出し”が実現しましたが、当夜ホテルでドネアが息子たちとこのトロフィーを囲む動画が彼のTwitterにアップされます。そこで息子たちはドネアに促されて泣きじゃくりながら「イノウエさん、トロフィーをありがとうございます。チャンピオン、おめでとうございます」と言います。ドネアはTwitterに「最善を尽くしても、成し遂げられないこともある。息子たちにとっていい教訓になった」とつぶやきました。後に全米ボクシング記者協会はこの試合を年間最高試合に選び、“100年に一度の名勝負”と評されるのですが、自身のプライドを捨てても息子との約束を守ったドネアと、戦前からドネアを尊敬し合って試合に臨んだ井上の、人間としての度量の大きさがファイト内容に華を添えました。

前置きが長くなりましたが、この1年間の教室の動向について以下、お伝えします。2019年4月から計7名の先生方が入局してくれましたが、後期研修医（専攻医）入局者に関しては4名のみで、前年度に当教室に8名の入局者があったことで危機感を感じた他診療科との勧誘競争も厳しかったためか、目標には遠く及びませんでした。ただそんな中、教室に入局してくれた4名の先生方は本当に産婦人科学が大好きなんでしょうし、それだけ興味を持ってくれたのでしょから、教室としては最善の研修環境を提供したいと思っています。また以前九州大学からの出張で指宿医療センターの部長を務めていた恒松良祐先生が、教室に入局のうえ4月から鹿児島医療センターに部長として勤務してくれることになりました。女性医学が専門で臨床遺伝専門医でもある恒松先生と婦人科がんが専門の大田俊一郎部長のお二人が指導してくれる鹿児島医療センターは、さらに充実した教室関連の医育機関となりました。残る2名の新入局者は、2018年から三反園県知事が“安心して産み育てられる鹿児島県”の政策テーマのもと、県内の産婦人科医を増やすため当教室に下さった“特任助教枠”が2枠に増枠されたため、そこでお迎えできました。高知大学の医局長だった牛若昂志先生と東京女子医科大学八千代センターに勤務していた田代英史先生ですが、牛若先生は3年間の予定で婦人科腫瘍専門医を習得するために国内留学され、その

後戻る高知大学産婦人科教室を腫瘍修練施設にして、後輩の腫瘍専門医育成に努められる予定です。熊本出身の田代先生は周産期専門医でずっと産科医療を専門にしておりましたが、ご縁あってご家族で鹿児島に永住されることになり、2020年春からは指宿医療センターの指導者として出張してもらう予定です。田代先生の後任ポストには東京慈恵医大から助教の先生が腫瘍の勉強にみえますし、元名古屋大学の病院講師で前愛知がんセンター部長であった先生も当教室に入局して下さることになったので、今春から県がもう一枠増枠して下さる“特任講師枠”でお迎えする予定です。これにより、婦人科がん患者さんの手術待ちが減るのはもちろん、臨床研究もより進むのではと期待しています。この県が提供くださる特任助教・講師ポストの支援事業により、とくに人員不足が深刻であった中堅教室員数の増加が実現し、そのおかげで鹿屋医療センター、県立大島病院、川内済生会病院に十分な数の産婦人科医を派遣することが可能となりました。

前述の指宿医療センターは指宿市が寄付講座を九州大学産婦人科に申し出たことに呼応し、九州大学が6年間、2名の医師を派遣し産婦人科医師不足をしのいでいましたが、鹿児島大学から医師を派遣してもらいたいという以前からの要望に応じて、ようやく2020年春から当教室が派遣できるようになりました。ただ、2名では大変ですので田代先生含めて3名の教室員を派遣することとしました。これに連動して、寄付講座も当教室に移設されることになりましたので、“婦人科がん先端医療学講座”と命名して、1) 婦人科がんに対するがん遺伝子パネル検査、2) ナノメディシンを利用した低毒性抗がん剤の開発、3) 子宮がんに対するセンチネルノードナビゲーションサージャリー、4) 妊孕性温存・挙児希望を希望する若年子宮頸がん患者に対する広汎子宮頸部摘出術、5) 婦人科がんロボット手術による患者 QOL 向上とロボット手術遠隔医療に関する研究、の5つの研究テーマに取り組むことにしました。医師派遣と寄付講座設置を直接の利害関係で説明することは昨今の世情を鑑みますと憚れますが、私たちが推進したい研究テーマを受けて、指宿市議会で検討がなされ、今春からは鹿児島大学産婦人科の研究テーマを指宿市女性の健康増進のためにもサポートしたいという決議を経て実現した事業で、その実現のためにも今度は当教室から3名の医師が指宿医療センターで勤務する訳です。同門の皆様にもご理解いただきたく、この紙面を借りて、“婦人科がん先端医療学講座”の発足当時における5つの研究テーマに関して説明します。

1) は2015年、当時の米国オバマ大統領が一般教書演説で言及しトピックスとなったプレシジョン・メディシン（精密医療）で、がん組織・患者血液などから、次世代シーケンスを用いてそのがん特有の遺伝子変異を検出し、そのがんの有効な薬物を患者さんに届けるという個別化医療の一種です。当学病理学教室との共同研究のもと、すでに開発済みの婦人科がんの特化した独自のがん遺伝子パネル検査を用いて、個々の婦人科がんに関わる遺伝子発現の違いや特徴を明らかにしていく臨床試験がスタートしていますが、この領域は日進月歩で、すでに開始した全エクソンシーケンスによる解析の先には、患者の全ゲノムシーケンスを行ってさらに詳細に個々のがんの特性を解析する時代がすぐそこまで来ています。よって現在の我々の婦人科がん遺伝子パネルを用いた研究が先進性を持つのもここ数年に限られ、近年多く入局してくれた教室員の中から大学院生を安定して誕生させられる頃には研究のノベルティが低下してしまう可能性があります。さらに困ったことに、増えてきたがんゲノムの臨床試験を外来で患者さんに説明し同意を取得する医師、手術場と病理部を密接につないで手術検体を運搬・処理し正確な臨床情報を伝えてくれる医師としても大学院生が早急に必要のため、学外に候補者を求めました。幸い九州

大学の教室員を4年間預らせて頂くことができましたので、その院生にはこの寄附講座と病理学教室に籍を置きながら上記の仕事をこなし、当教室から将来誕生していく院生たちへの橋渡しをお願いしようと思っています。

2) は熊本大学薬学部の名誉教授であられる前田浩博士と共同研究してきたナノメディシン技術により既存の抗がん剤を高分子化し、がん細胞特異的に作用させようというドラッグデリバリーシステムの研究です。この薬剤は①腫瘍新生血管の特徴を利用してがん病巣に選択的に集まり、②がん病巣特有の低 pH 環境下で活性体を放出し、③がん細胞膜上のトランスポーターにより速やかに細胞内に取り込まれ効果を発揮する、という興味深い薬剤です。その高い抗腫瘍効果と患者への低毒性はすでに一部の進行再発症例で確認され論文報告されていますが、この研究を中心に婦人科がんの基礎研究を発展させるため、現在、スウェーデンのカロリンスカ研究所に留学中でシニアラボマネージャーを務めている Ph.D. の先生をこの寄附講座に招聘する予定です。現在、その先生が同研究所で関わっているプロジェクトの終了まであと1-2年かかる見通しですので、それまでは本講座の客員講師として当教室と連絡を取り合い、帰国次第、特任講師として研究に参画していただく予定です。私も大学院生・留学時代からこの領域の研究を続けてきたので、興味あるテーマが他にも多々あります。私はもう実験する楽しい時間を持つことはかありませんが、この領域での大学院進学を希望する教室員たちには、この先生の指導のもと基礎研究の楽しさを満喫してもらい、本プロジェクトを大きく展開・発展していただきたいと思います。

3-4) は今までも碩門会誌などでご報告してきたので詳細は割愛しますが、5) はその2種の手術や高リスク体癌根治手術（傍大動脈リンパ節郭清や大網切除術上腹部手術）などをロボット手術で行い、子宮がん患者さんの QOL 向上を目指すプロジェクトと、ロボット手術システムによる遠隔医療の可能性を検討するプロジェクトです。前者のうちセンチネルノードナビゲーションサージャリーはすでに患者費用負担なく、ロボット手術で多数行ってきました。広汎子宮頸部摘出術と高リスク体癌根治手術をロボットで行う試みはダヴィンチシステム販売企業であるインテュイティブサージカル社からも受託研究として依頼され、すでにそれぞれ5例の手術が無事に終わり、現在は患者私費臨床試験（保険未収載のため）に移行し症例を重ねています。今後この手術を開始する施設への参考にと、インテュイティブサージカル社と協同して手術マニュアルも作成しましたので、さらに症例を重ねて両術式の確立および高度先進医療への移行を目指していきます。後者のロボット手術による遠隔医療の開発に関しては、厚生労働省が2019年に当学を含め国内4大学をそのモデル施設に認定してくれました。すでに医療における“患者と医師による対面診療の原則”が厚労省により緩和され、熟練した術者がロボットを遠隔操作し、遠く離れた地域の患者を手術しようとするテレ・サージャリーの環境は整いました。今後は日本外科学会が主導してこの4大学の外科系各科を中心に遠隔医療の試みを進めていくこととなりますが、当教室はロボット手術症例数が豊富なだけでなく、私が国内で数人しかいない婦人科ロボット手術の見学執刀者（メンター）に認定されていることに加え、国内の手術指導者（プロクター）の育成および認定委員会の委員長であるため、婦人科におけるこのプロジェクトの中心的役割を務めることができそうです。

2016年4月から教室を主宰してもう4年目が間近で、2021年4月からは後半の5年間に突入します。まだまだ実現できていないことが多々ありますので、教室員を増やすことは今後も最優先

課題です。今回述べたように、昨年度11名（うち中堅3名）、本年度7名（うち中堅3名）、来年度10名（うち中堅3名）と教室員を増やすことは少しずつ実現しています。今後もさらに教室員を増やして、鹿児島県の地域医療を安定させるだけでなく、大学院進学や市立病院産婦人科・NICUや麻酔科・救急部への派遣等々、教室員一人一人の希望に応じたダイバーシティ（多様性）に富んだ教室運営をしていきたいと思っています。そうすれば私が願う“4つ全てのサブスペシャリティの臨床・研究の充実”につながり、退任の時には質・量ともに充実した国内有数の教室として次世代に引き継ぎたいと考えています。同門の皆様におかれましては引き続き、教室員増に向けてご支援のほど宜しくお願い申し上げます。